多文化をあきなう

大学生とフェアトレード

大野敦（おおの あつし）　立命館大学 准教授

フェアトレードは手軽で身近な国際貢献として、授業やサークルなど、大学においてさまざまな活動に利用されている。そこには、どのような課題があるのだろうか。

学生が興味をもつ理由

生産者や労働者に正当な労働の対価を支払うことと、そのしくみづくりを商いの目的としているフェアトレードは、イギリス・スイスを中心とした欧米諸国で消費が拡大し、日本や韓国などアジア諸国があらたな消費地として成長している。

一般的に、フェアトレードの消費者は三〇代の学歴が高い女性が多い、という傾向が全世界的にあらわれている。大学生の場合は男女に大きな差はなく、フェアトレードに興味のある学生は多い。筆者は前任校の神戸国際大学経済学部で開発経済学の授業を四年間おこなった。学期末に一番興味をもったトピックを尋ねると、半分以上の学生がフェアトレードと答えている。学生がフェアトレードに興味をもつ理由は、身近な消費活動であること、手軽な国際貢献であることなどである。こうした学生の関心を背景に、高校や大学でフェアトレードが教育に生かされる例は多い。学生の変化が保護者の社会意識の変化を促すことは、筆者のこれまでの経験から確認することができ、フェアトレード教育は、持続可能な商いの形態を社会全体として考えるひとつの契機になっている。

やりがいを求めて

学生のフェアトレード認知度は近年上昇している。筆者が立命館大学経済学部の新入生にアンケートを取ったところ、九〇パーセントの学生が大学一年生四月の段階でフェアトレードを認知していた。これは、教科書への記載がなされ、二年連続でセンター試験の問題あるいは問題文としてフェアトレードが登場していることが理由としてあげられる。一方で、フェアトレード商品を購買したことがある大学生は多くない。購買することができない理由としては、身近で商品が見つけにくいこと、コーヒー・紅茶・バナナ・チョコレートといった嗜好品（しこうひん）を学生は積極的に消費しないこと、があげられる。購買した経験がある学生も、その金額や回数は多くなかった。

一方、積極的にフェアトレード活動に取り組む学生もいる。大学のフェアトレードサークルやFTSN（フェアトレード・スチューデント・ネットワーク）のメンバーとして、あるいは地域のフェアトレード団体やタウン運動に参加することで、フェアトレードにかかわることができる。

多くの学生活動は、大学生協と連携した学内での普及活動のみならず、街チョコ活動（商店街などでオリジナルなフェアトレード・チョコレートを企画販売すること）など学外でも活発な活動をおこなっている。こうした活動への参加は、学生に対して社会との接点という貴重な経験を与え、体験学習の一種として機能している。さまざまな意味をもつフェアトレードとのかかわりを通して、学生自身がフェアという概念を見つめなおす多くの機会を得ている。

また、学生を受け入れるフェアトレード団体や地域社会も、こうした学生の参加や取組の多くを、活動拡大の機会として好意的に受け入れ、共同で活動をおこなうことが多い。一方で、フェアトレードをおこなう企業やNGO側が学生を安価あるいは無償の労働力として考え、ある種の「やりがい搾取」が発生しているケースも多くはないが存在する。その原因は、フェアトレード団体と学生のあいだにある労働の質とやりがいとの相互認識のギャップにある。

学生の使命はどこに

このようにフェアトレードにかかわる学生の活動が活発であるのに対して、学問としてのフェアトレードは低調である。学生が自主的におこなう活動の多くはイベントに留（とど）まっており、学問との接点は弱い。これは、他の途上国にかかわる学生の活動の多くに共通する問題だが、自らの活動の社会的インパクトが冷静に検討されているわけではない。学生の多くに、自主的な活動を学問的レベルに引き上げる必要があるという発想が弱い。

筆者の大学でも、フェアトレードをテーマとする卒業論文が毎年数本は書かれているが、その質は学内で高く評価されているとは限らない。これは、フェアトレード研究自体に十分な蓄積がなく、学生が参照できる文献が少ないことや、フェアトレード団体のキャパシティの問題から、学生に活動の場を提供できても、研究の素材を提供できないことに起因する。フェアトレード団体側が、学生の社会的使命である学業の修得へどのような貢献ができるかがわからないことも大きな課題である。

イギリスをはじめとする欧米諸国では、フェアトレードタウンの派生形としてフェアトレード大学の認証が進んでいる。これらは、大学におけるフェアトレードの普及・調達の拡大を担っており、アメリカやオーストラリアではフェアトレード教育の普及を目指している。それぞれに課題は大きく、諸外国の制度をそのまま移植することはできないが、大学における学問としてのフェアトレードを考え直すひとつのきっかけになる制度であろう。

このように、大学生とフェアトレードの関係にはいくつもの課題があるが、学生の社会的な関心を育てるフェアトレードは、教育関係者にとって大きな希望のひとつである。

フェアトレードネットワーク名古屋の会合にて学生の報告

オープンキャンパスにて学内の食堂でフェアトレードコーヒーを配布中

FTSNの会議のようす

学外のバザーにてフェアトレード商品を販売